

南アルプス山村地域における「地域の人」の再編と地域成員性に関する研究

周玉琴（東北大学大学院情報科学研究科・特任助教）

1 研究の背景

高度経済成長期以降、日本の農山村では過疎化・高齢化が進み、従来の共同体の維持基盤が大きく揺らいでいる。静岡市I地区

においても、焼畑農業や雑穀栽培、山林利用を基盤とした複合的生業は衰退し、近年ではそれらが「生業」よりも「文化」や「遺産」として位置づけられる傾向が強まっている。他方で、移住者や再移住者の流入、他出子との継続的な関わり、さらには農業継承をめぐる新たな実践が進行しており、地域社会の担い手や成員資格をめぐる再編が生じている。本研究は、このような人口移動と生業変容のもとで、誰がどのように「地域の人」として位置づけられるのかを明らかにすることを目的とした。

2 研究の方法

2023年度から2025年度にかけて、井川地域において参与観察、半構造化インタビュー、質問紙調査、地域資料の収集・分析を継続的に実施した。調査対象は、移住者、Uターン者、ダム建設期流入住民の家族、在来作物の継承実践者、他出子、地域女性グループなど多岐にわたる。方法としては、ライフストーリー法を用いて個々人の語りを時間的文脈の中で把握するとともに、自治会参加、共同作業、近隣互助、祭礼や学校行事への関与など、日常実践を通じて境界がどのように運用されるかを追跡した。分析にあたっては、「制度的アクセス」「互酬的關係」「象徴的承認」という三層から地域成員性を捉える視角を導入した。

3 研究の成果

第一に、井川地域における焼畑農業と在来作物の位置づけが、生業から文化実践・地域資源へと再編されてきた過程を明らかにした。第二に、移住者・再移住者については、自治会加入や空き家取得などの制度的接続、近隣との助け合い・媒介者を通じた関係形成、さらに呼称や役割付与を通じた象徴的承認が重なり合うことで、「地域の人」としての位置づけが形成されることを示した。第三に、他出子については、現住地が地域外にあっても、家・墓・土地、帰省、親族支援、将来の帰村意識などを通じて地域成員性が維持・再編されていることを確認した。これらの成果は、学会発表、掲載論文2本、投稿論文1本という形で公表・発信を進めている。

4 研究の意義と展望

本研究の意義は、山村における成員資格を血縁・地縁・定住の有無だけで捉えるのではなく、制度、関係、象徴、実践の重なりからなる動的プロセスとして把握した点にある。これにより、移住者、再移住者、他出子、農業継承の担い手といった多様な主体を、地域社会の内部／外部という固定的二分法を超えて分析する視角を提示できた。今後は、井川地域で得られた知見を他地域との比較へと展開するとともに、地域展示や報告会等を通じて研究成果を地域へ還元し、人口減少下における新たな地域成員性のあり方をさらに検討していきたい。

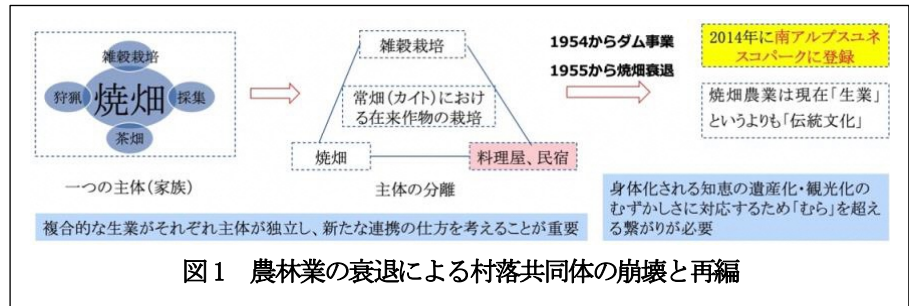


図1 農林業の衰退による村落共同体の崩壊と再編

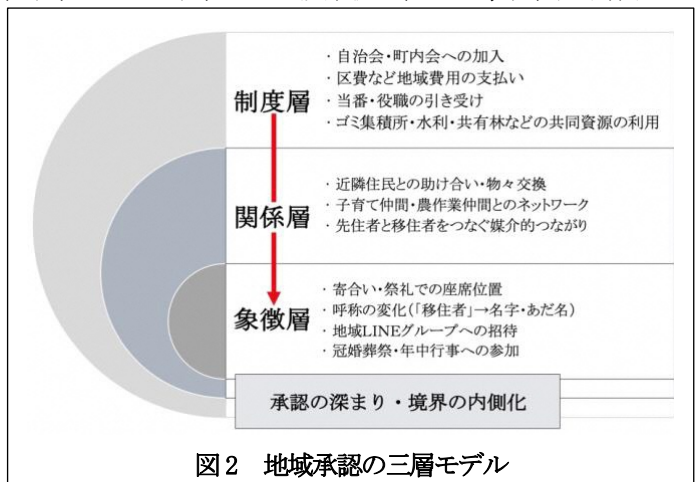


図2 地域承認の三層モデル